

『日葡辞書』に見る古代語形容詞語構成の変化

于 艶 麗

1. はじめに

形容詞は、性質・情態、感覚・感情などを表し、独自の活用を有する品詞である。その種類にはク活用とシク活用があり、シク活用は、ク活用と比べて、その発生・発達が遅れたと見られている。『時代別国語大辞典上代編』（1967）に収録されているク活用形容詞は156語であり、シク活用形容詞は142語である。

平安時代末期になると、連体形の終止用法が広まり、古代語の終止形は次第に消滅していく。こうして、古代語形容詞の連体形が終止連体形となり、「～き」から「～い」へと転化することによって、ク活用とシク活用の区別の消滅という大きな変化が生じた。その活用における変化とは別に、平安時代から室町時代まで、古代語形容詞の語構成には、どのような変化があったのか、『日葡辞書』（『邦訳日葡辞書』岩波書店による）を中心に、その語構成の変化を考察してみたい。

『日葡辞書』は、1603年イエズス会宣教師らが編纂した日本語とポルトガル語の対訳辞書で、京都の話し言葉を中心として、雅語・俗語・方言・婦人語などを含め約三万二千語を採録し、語義・用例を示すほか、語法・発音まで説明が及ぶという、日本語史を考察する上で不可欠の、第一級の資料である。本稿では、『日葡辞書』は『邦訳日葡辞書』（1980）を用いることにする。

2. 上代語ク活用形容詞の語構成

『時代別国語大辞典上代編』（1967）に収録されているク活用形容詞は156語である。その語構成から見ると、次のようである。

（1）接辞「し」の添加によるもの

① 語基に「し」がついたもの

ク活用をするものは、外形的・状態的属性を表す語基にシがついたものが多い。

例 熱・厚・青・薄・遅・多・重・堅・軽・狭・寒・茂・白・近・小・強・遠・長・

柔・早・広・太・細・短・脆・安・緩・弱・若 など

② 動詞から派生したもの

例 あかし（あく） あさし（あす） あらし（ある） くらし（くる） くろし（く
る） ふかし（ふく） ふるし（ふる）

ク活用形容詞の中で、動詞から派生したものは極めて少ない。

（2）「し」以外の接辞の添加によるもの

① 接頭語「か・さ・た」の添加によるもの

例 かぐろし かやすし さどほし さまねし たどほし たやすし など

② 接尾語「なし」の添加によるもの

例 あぢきなし (あづきなし) いらなし うつなし うやなし (ゐやなし) うら
もとなし おぎろなし こころなし ことなし さがなし すべなし つつがな
し つねなし みつなし をめなし など

③ 接尾語「けし」の添加によるもの

例 あからけし あきらけし あざらけし あたたけし いささけし けやけし さ
やけし しづけし すむやけし たしけし たひらけし つばひらけし やすら
けし ゆたけし など

(3) 単語と単語とを合わせたもの

① 名詞+形容詞

例 うらわかし おとだかし【音高】 かほよし【端正】 くさぶかし【草深】 こ
ころいたし【情哀】 こだかし【木高】 こちたし【言痛】 こととし【言急】

② 動詞連用形+形容詞 ききよし【聞吉】 こひたし【恋痛】

③ 語基+形容詞 とほながし【遠長】

3. 上代語シク活用形容詞の語構成

『時代別国語大辞典上代編』(1967)に収録されているシク活用形容詞は142語である。その語構成から見ると、次のようである。

(1) 接辞「し」の添加によるもの

① 語基に「し」がついたもの

周知のように、ク活用形容詞と比べて、シク活用をするものには情意を表す語基が多い。

例 ^{あからし} 懇・^{あたらし} 惜・^{いたはし} 勞・^{うれし} 嬉・^{かなし} 悲・^{くるし} 苦・^{さぶし} 不樂・^{したし} 親・^{たくまし} 快・^{たのし} 樂・^{はし} 愛・^{むがし} 幸 など

また、形容詞から動詞を派生するもの、或は動詞と同源であるものも少なくない。

例 あからし (あからしむ) あたらし (あたらしむ) あやし (あやしむ・あやしむ)
いそし (いそふ) いたはし (いたはる) いふかし (いふかる) うつし
(うつす) うれし (うれしむ・うれしむ) おほほし (おほとる) かなし (か
なしむ・かなしむ) くし (くしむ) くるし (くるしむ・くるしむ) さだし
(さだむ) さぶし (さぶ) すずし (すずむ) たくまし (たくましむ) は
げし (はげむ) ほし (ほる) やはし (やはす) をし (をしむ) など

② 動詞から派生したもの

例 あさまし (あさむ) いきどほろし (いきどほる) いたぶらし (いたぶる) い
つくし (いつく) いとはし (いとふ) いとほし (いとふ) うたがはし (うた
がふ) うらごひし (うらごふ) うらごほし (うらごふ) うらめし (うらむ)
うらやまし (うらやむ) うるはし (うるふ) おもほし (おもふ) およし (お

ゆ) かからはし(かからふ) かたまし(かたむ) くすばし(くしぶ) くやし(くゆ) こひし(こふ) こほし(こふ) さびし(さぶ) したゑまし(したゑむ) たたはし(たたふ) たのもし(たのむ) つからし(つかる) なぐし(なぐ) なつかし(なつく) なみだぐまし(なみだぐむ) なやまし(なやむ) ねがはし(ねがふ) はづかし(はづ) むつまし(むつむ) めだし(めづ) めづらし(めづ) やさし(やす) ゆるほし(ゆるふ) よろこぼし(よろこぶ) よらし(よる) よろし(よる) わびし(わぶ) ゑまし(ゑむ) ゑまはし(ゑまふ) など

シク活用形容詞の中で、動詞から派生したものが圧倒的に多い。動詞から派生したものはほとんどシク活用する。

③ 疊語形(語基を重ねた形)に「し」がついたもの

例 いつつし うやうやし おこおこし おどろおどろし おほほし きらきらしく
くだくだし くまくまし ござし すがすがし(そがそがし) たぎたぎし たづ
たづし とほとほし ながながし ひねひねし ゆゆし わきわきし をさをさ
し ををし など

これはシク活用形容詞特有の語構成形式である。疊語形に「し」がついたもの、すなわち疊語形容詞(重複形容詞)は必ずシク活用する。

(2) 「し」以外の接辞の添加によるもの

① 接頭語の添加によるもの ものかなし ものこひし

② 接尾語の添加によるもの みだりかはし

上代語シク活用形容詞の中で、「し」以外の接辞の添加によるもの、すなわち派生形容詞の数は極めて少ない。

(3) 単語と単語とを合わせたもの

① 名詞+形容詞

例 うらがなし うらぐはし うろごひし うらごほし かぐはし ころろがなし
ころろぐるし ころろこひし なぐはし はなぐはし まぐはし

② 動詞連用形+形容詞 おもひがなし おもひぐるし きほし みほし みがほし

③ 語基+形容詞 うただぬし うただのし

「うら・おもひ・ころろ・くはし・ほし」など、複合に用いる語彙は限られている。

4. 『日葡辞書』に見るク活用形容詞の語構成の変化

『日葡辞書』(1980)に収録されているク活用形容詞は275語である。その語構成を分析し、上代語ク活用形容詞の語構成と比較すると、次のような変化があることがわかる(表1参照)。

まず、上代語ク活用156語の中で、単純形容詞、派生形容詞、複合形容詞はそれぞれ47%、32%、21%を占めている。これに対して、『日葡辞書』(1980)収録の275語の中で、三者の比重は、37%、23%、40%である。つまり、単純形容詞と派生形容詞の比重はそれぞれ10%ほど減少し、複合形容詞は20%ほど増加している。特に、複

合形容詞の増加は注目されるところである。

また、語構造を見ると、単純形容詞の中で、「語基＋し」と「動詞未然形（被覆形）＋し」にはあまり増加は見えなかったが、動詞連用形、形容動詞語幹、名詞と副詞に「し」を付けて作られたものが現れている。派生形容詞には新しい接頭語がいくつか現れるが、生産性は持っていない。また、上代からの接尾語「なし」は依然として造語力を発揮しているが、「けし」は消滅し、新しい接尾語も現れていない。複合形容詞の中では、「名詞＋形容詞」の増加が著しく、また、「なんでもない」のような特殊構成の語も現れた。

5. 『日葡辞書』に見るシク活用形容詞の語構成の変化

『日葡辞書』（1980）に収録されているシク活用形容詞は222語である。その語構成について、上代語シク活用形容詞と比較すると、次のような変化があったことがわかる（表2参照）。

まず、上代語シク活用形容詞142語では、単純形容詞は70%、複合形容詞は27%（畳語形容詞は14%、「前項＋形容詞」は13%）を占め、派生形容詞は極めて少ない。これに対して、『日葡辞書』収録の222語は、単純形容詞は46%、複合形容詞は27%（畳語形容詞は19%、「前項＋形容詞」は8%）を占めているが、なかでも全体の21%を占めるようになった派生形容詞は最も注目される（その他は6%ある）。

語構造から見ると、単純形容詞の中では「動詞未然形（被覆形）＋し」が依然として優勢を持ち、従来の名詞や副詞以外に「いみじい」「おさなしい」「すぐしい」のような動詞連用形・形容詞語幹・形容動詞語幹に「し」を付くものも現れた。複合形容詞の中では、畳語形容詞の語数はかなり増えたが、その他の複合形容詞はそれほど変わりがない。すぐれた生産性を持つ接尾語「がまし」「らし」の出現は派生形容詞の大量増加の原因ともなっている。

6. おわりに

『日葡辞書』に見る形容詞語構成の変化には、ク活用形容詞では「名詞＋形容詞」が増加し、シク活用形容詞では畳語形容詞が増加するとともに、派生形容詞が発展したことが注目される。上代から中世にかけて、形容詞語構成の特徴として現れるのは、複合と派生によって、合成形容詞が大量に産み出されたことである。

合成形容詞の大量出現という事態に伴って、語基の情意性に影響される上代におけるク活用形容詞とシク活用形容詞の秩序ある対立関係の緊張は次第に緩んでくる。鎌倉時代以降、ク活用からシク活用に变化した語、あるいは一時的に両方の活用をする語が現れた。さらに、室町時代において、連体形のイ音便形が終止形の機能を兼ねるようになり、ク活用・シク活用の区別が消滅したのである。形容詞語構成の変化は、活用において変化が生じることとなった。

【参考文献】

『時代別国語大辞典上代編』（1967）三省堂

『時代別国語大辞典室町時代編』（1985～2000年）三省堂

土井忠生・森田武・長南実編訳（1980）『邦訳日葡辞書』岩波書店
 森田武編（1989 年）『邦訳日葡辞書索引』岩波書店
 阪倉篤義（1966）『語構成の研究』角川書店 1996 年第六版
 村田菜穂子（2005）『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』和泉書院
 山本俊英（1955）「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」『国語学』23 号
 于艶麗（2009）「上代シク活用形容詞に関する考察」『立教大学大学院日本文学論叢』（第 9 号）

表 1 『時代別国語大辞典上代編』『日葡辞書』ク活用形容詞の語構成比較			
上代語ク活用	156	『日葡語書』ク活用	275
語基＋シ	67	語基＋シ	86
動詞未然形＋シ	7	動詞未然形＋シ	8
		動詞連用形＋シ	1
		形容動詞語幹	3
		名詞＋シ	2
		副詞＋シ	1
単純形容詞	74	単純形容詞	101
名詞＋形容詞	19	名詞＋形容詞	78
語基＋形容詞	6	語基＋形容詞	6
形容詞語幹＋形容詞	2	形容詞語幹＋形容詞	7
動詞連用形＋形容詞	5	動詞連用形＋形容詞	17
		副詞＋形容詞	1
複合形容詞	32	複合形容詞	109
接頭語による派生形容詞	[8]	接頭語による派生形容詞	[7]
カ＋形容詞	2	イラ＋形容詞	1
サ＋形容詞	2	ウソ＋形容詞	1
タ＋形容詞	4	コ＋形容詞	1
		タ＋形容詞	1
		マ＋形容詞	2
		ヨ＋形容詞	1
接尾語による派生形容詞	[42]	接尾語による派生形容詞	[55]
ナシ	29	ナシ	53
語基＋ケシ	13	語基＋ケシ	2

派生形容詞	50	派生形容詞	62
その他	0	その他	3
★接尾語「ナシ」		★接尾語「ナシ」	
語基＋ナシ	18	語基＋ナシ	16
名詞＋ナシ	11	名詞＋ナシ	25
		形容詞語幹＋ナシ	3
		形容動詞語幹＋ナシ	4
		動詞連用形＋ナシ	4
		副詞＋ナシ	1

表2 『時代別国語大辞典上代編』『日葡辞書』シク活用形容詞の語構成比較			
上代語シク活用	142	『日葡辞書』シク活用	222
名詞＋シ	4	名詞＋シ	3
語基＋シ	51	語基＋シ	43
動詞未然形＋シ	39	動詞未然形＋シ	45
動詞未然形＋ハシ	2	動詞未然形＋ハシ	5
副詞＋シ	3	副詞＋シ	2
		動詞連用形＋シ	1
		形容詞語幹＋シ	1
		形容動詞語幹＋シ	2
単純形容詞	99	単純形容詞	102
名詞の重複＋シ	6	名詞の重複＋シ	11
語基の重複＋シ	11	語基の重複＋シ	10
形容詞語幹の重複＋シ	2	形容詞語幹の重複＋シ	13
動詞連用形の重複＋シ	1	動詞連用形の重複＋シ	4
		形容動詞語幹の重複＋シ	2
		動詞未然形の重複＋シ	2
疊語形容詞	20	疊語形容詞	42
名詞＋形容詞	11	名詞＋形容詞	13
語基＋形容詞	2	語基＋形容詞	2

動詞連用形＋形容詞	5	動詞連用形＋形容詞	2
		副詞＋形容詞	1
複合形容詞（疊語を除く）	18	複合形容詞（疊語を除く）	18
接頭語による派生形容詞	[2]	接頭語による派生形容詞	[8]
モノ＋形容詞	2	モノ＋形容詞	4
		アナ＋形容詞	2
		イク＋形容詞	1
		コ＋形容詞	1
接尾語による派生形容詞	[2]	接尾語による派生形容詞	[38]
動詞連用形＋カハシ	1	ガハシ	2
名詞＋グマシ	1		
		語基＋カマシ	1
		ガマシ	13
		メカシ	2
		ラシ	20
派生形容詞	4	派生形容詞	46
その他	1	その他	14
		★接尾語「ガマシ」	
		名詞＋ガマシ	9
		形容詞語幹＋ガマシ	1
		動詞連用形＋ガマシ	3
		★接尾語「ラシ」	
		名詞＋ラシ	16
		語基＋ラシ	1
		形容動詞語幹＋ラシ	2
		動詞連用形＋ラシ	1